風翔龍でゴットイーター

赤い雫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公、天切風魔は目が覚めたらゴットイーターの世界にいた。しかも体が人間ではない様子。

「うん？いやまてまてまて！あきらかに世界が違う！」

ーーそう、なんと”あの”古龍だったのだ。

注意：主人公はアラガミ化しています。

目　次

龍の目覚め ―― 1
体の性能と食事 ―― 4
ゴッドイーターと接触 ―― 7
防衛斑と鋼鉄の龍 ―― 10
二ヶ月後、黒髪幼女 ―― 13
原作は始まっていた ―― 16
ゴッドイーターの襲撃 ―― 19
大量の食事 ―― 21
原作少し崩壊 ―― 24

龍の目覚め

　やぁ、突然なんだけど一つ聞きたい

ーー目が覚めたら雪の上で目の前に寺があるんだけどどうすればいいと思う？
いや、うん意味不明なのは分かってるぞ？ただ、俺もどうすればいいか分からないんだ。
どう見てもゴッドイーターの鎮魂の廃寺ですねほんとにありがとうございましたー（泣
ってやべぇじゃん！アラガミとかでたら即死ぬじゃん！
どうしろってんだ……
「グルゥ（はぁ）」
え？まって今、おかしな声が聞こえなかった？こう、獣が唸るような声が。もしかして近くにアラガミがでたのかなーなんて………
ああ分かってるさ、現実逃避だって事くらい。
ーーアラガミは俺だった。
「グルオォォォーーー（なんでだーーーーーーー）！！！」
人気のない廃寺に咆哮が虚しく響いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

さて、さっきは取り乱したけど大丈夫だ。
でもまさかアラガミになるとはなー。正直ゴッドイーターがよかった。
アラガミの状態で第一部隊にあってみろ、絶対死ぬ。
で俺はそのアラガミになった訳だから、人類から狙われる。
あえて人間に協力して安全だと分かって貰って狙われないようにするのもありだけど。
でもあまり人間好きじゃないんだよなー。無駄に強欲な所とか、他

人を蹴落とす所とか。
かと言って殲滅しようとすると目をつけられて面倒。
こんな時は関わらないのが一番だな！よし、静かに暮そう。平和が一番だ。
「グオ、グオォ！」
大人しくする事に決めた時、外からなんか聞こえた。
あ、今いる場所はエリアPな。と何がいるんだろう。
そう思って見てみると……
オウガテイル、ザイゴート、コクーンメイデンの群れがいた。
ちょ！なんで集まってらっしゃるの！ってさっき俺叫んだじゃん！やばい。これはやばい。小型とはいえあんなに大量にいたら恐らく俺死ぬ。うん、逃げよう。
そう思い、全力で逃げた。
――――――――――――――――――――――――――――――――
ふぅ、逃げ切ったかな？なんか四本足だったけど普通に走れた。つーか俺ってなんのアラガミだ？四本足だからヴァジュラとかかな？
まずは足元を見る。
人間の胴くらいの太さに鋭い爪。更には鋼で出来ているようだ。
次に後ろを見てみる。
最初に目についたのは大きな翼だった。こちらも鋼で出来ていた。
更に奥の方を見ると、細い尻尾が見えた。もちろん鋼で出来ていた。
嫌な予感がした。
すぐに走り回り水場を見つけて覗き込んだ。
其処にあったのは、
厳つい龍の顔、四本の足、一対の大きな翼、そして何より全身を覆う鋼、
クシャルダオラだった。
クシャルダオラとはモンスターハンターに出てくるモンスターでその中でも強力なモンスター、古龍と呼ばれる種である。クシャルダ

オラは風を纏い、硬い甲殻をもっている事で知られている。その力は簡単に街を破壊できるほど、はっきり言って天災級のモンスターだ。

そして俺はそれになった訳だ。

とりあえず一言。

「グルオォォォォ（世界が違う）!!」

体の性能と食事

やぁ！　皆のアイドル、くーちゃんだよ☆ミ

うん、ごめん気持ち悪かったな。ほんとスマン。

ま…まぁそれは置いといて、俺はクシャルダオラになったんだが。ここでクシャルダオラについて詳しく説明しよう。　要らないって？　文字稼ぎだよ言わせんな。

鋼龍クシャルダオラ　またの名を風翔龍

古龍種　古龍目　鋼龍亜目　クシャナ科

熱帯、乾燥帯、寒帯など広い地域で目撃されている大型古龍。全身が鋼鉄の強度と性質を持つ鱗や甲殻に覆われていることから＜鋼龍＞と呼ばれている。

肉と骨の区別が無く、すなわち全身の甲殻は骨と完全に一体化しており、これによって鋼の甲殻を持ちながら自在に動き回ることを可能としている。

更には風や天候を自在に操作する能力を持っており、クシャルダオラの出現地域には大木が折れんばかりの突風や数メートル先の視界をも奪う暴風雨や猛吹雪が観測される事が多々ある。

と、こんな所か。これｗｉｋｉ参照な。

長々と書いたわけだが、俺が言いたい事は

「グルオオオオーーー（絶対ゴッドイーターに狙われるだろこれ）!!」

ちくしょう…世界ちゃんと合わせろよ。何か体がオラクル細胞で出来ているみたいだし……。

もう攻撃してきた奴だけ撃退する方向でいくか。一応攻撃性はない事をアピールして置こう。

感覚で分かるんだがこの体凄く強い。クシャルダオラだしオラクル細胞も有るっぽい。

クシャルダオラにオラクル細胞とか何これチート？

と言っても使いこなす事が出来なきゃ意味ないんだけどな。使い

こなせるように頑張るか。
そんじゃまずは肉体性能の確認だな。
ーー地面を走る。
凄いスピードがでた。百メートル三秒くらい。
ーー尻尾で地面を叩く。
かなりえぐれた。小学生くらいの子供が入れるくらい。
ーー羽ばたいた。
衝撃波がでた。小さなクレーターが出来るくらい。
ーーブレスを吐いた。
目の前にあったビルが吹っ飛んだ。粉々になって。

ファッ?!
あれ?!クシャルダオラってこんなに強かったっけ?!ゲームじゃはじめの方の古龍だぞ?!搦手使うと簡単に倒せちゃう奴だよ?!攻撃した跡が凄い事になってるんだけど！一体クシャルダオラに何があった！
あまりの強さに暫く慌てていたクシャルダオラだった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーふぅ落ち着いた。
よく考えたらオラクル細胞があったか。うん、オラクル細胞なら何をしてもおかしくない。まぁこれだけ強ければ早々死ぬ事は無いだろうな。よかったと思って置こう。
慌てていて気付かなかったけど腹減ったなー。何か食い物探すか。あれ?クシャルダオラってなに食べるんだろう。やっぱ鋼龍だから鉱石類か?いや、アラガミだから何でも食えるか。それじゃ探すか。
そう言い、俺は更地になっている場所から移動した。

―――――――――――――――――――――――――――――

探し始めてから約十分、骸骨の顔と戦車のキャタピラで出来た足のクアドリガに出会った。

「ヴォオオォォ」

こちらを見つけてミサイルを撃ってくるクアドリガ。

「グルオォォ（ふん、甘いぜ）！」

横に跳んで避ける。そして一気に接近して首に噛み付く。

「ヴォオ?!」

驚いて振り離そうとするクアドリガ。だが離さない。

そしてそのまま噛み千切る。

「ヴォオオォォ……」

それだけでクアドリガは絶命した。何か呆気無いな。

よし、食うか。

「グオォォ（いただきます）」

む?!これは！

「グルオォォオーーー（うんめぇーーーー）!!」

何これめっちゃ美味い。てっきりオイル臭いのかと思ったけどソースみたいになってる。とにかく美味い。歯ごたえもあってなんかもう…生きてて良かった……。

よくあるアラガミになる主人公はクアドリガ不味いって言うけどそんな事なかった。多分あれだ、

鉱石類を食べるアラガミにとっては美味い。

そういう事だろう。

ゴッドイーターと接触

どうも皆さん。クアドリガが主食のクシャルダオラです。

はい、今現在なんとゲームお馴染みの贖罪の街にいます！ここでリンドウさん爺猫にやられるんだよなー。

ま、いいや。ここに来たのはクアドリガ探しのためだし。クアドリガマジ美味い。既に五十匹は喰った。

「グオォォーー（クアドリガ何処だー）」

そう言いながら探しているが中々見つからない。

そうそう、言い忘れてたけどクアドリガ喰いまくったのに全然体に変化がない。何かこう…細胞が変化を拒絶してるみたい。いや、別にいいんだけどね。ただでさえ古龍でチートなのにこれ以上進化してどうすんだって感じだし。

お？説明している間に発見！

ゴッドイーターも一緒に……。

「おい！タツミ、そっち行ったぞ！」

「分かってる！」

「アハハハハ！ねぇ痛い？痛いのぉぉ?!」

ああやってるなー。あれって防衛斑だっけ？いい連携だな。

「よし、いくぞ！ってカノンさん?!ちょ…ま…ぎゃあああ！」

「チッ！射線上に入るなって私言わなかったっけ？」

「タ…タツミィィィィ!!!!」

「ブ…ブレンダン。後は任せた……ぜ」（ガクッ）

「まて！しっかりしろ、傷は浅いぞ！」

う…うん、良い連携ダナー。誤射姫ぇ……。

まぁそれでもあんまり苦戦してないな。

「よし！トラップだ！」

「オーケー、たたみかけろ！」

「さぁ、消し炭になりなさい！」
　またカノン、それは作品が違う！あんた精霊関係無いだろ！
「止めだ！せいっ！」
　最後にタツミがショートブレードで斬ってクアドリガは倒れた。
いやーお見事、だな。
　防衛斑であれだけ動けるなら第一部隊とかどんだけ強いんだよ……。
「よーし！二人共お疲れ！」
「ああ、今回も生き残れたな」
「はい、私今回は誤射が少なかった気がします！」
　何処がだ。
「う…うむ、確かに少なかったかもな……」
「あ…ああ、そうだな……」
　ほら！二人共ちょっと引きぎみじゃねぇか！気づけよ！
「えへへ、ありがとうございます～」
　気づかない……だと?!これが天然か……恐ろしい。
　あ…そういえば今の時系列っていつだろう？カノンの服装からしてバーストかな？それならかなり楽だな。もし2からだったらブラットアーツとかリンクサポー
　トデバイスとかですげぇ面倒くさくなる。
　それに主人公はまだ一人だけだからな。二人揃ったらマジで死ねる。俺は死にたくない。
「そんじゃ、帰ろうぜ」
「ああ、そうだな」
「はい！帰ったらクッキー焼くんです！」
　おっとどうやらもう帰るみたいだ。まぁ俺にとってはありがたい。クアドリガ喰えなかったのは残念だが、ゴッドイーターに目を付けられるよりはマシだ。
　じゃ、とっとと退散しますか～。俺はこの場から移動しようとした。
　ガタッ

あ

「だれだ！」

うんテンプレだね。テンプレ何だけどさ…

「グルオォォォーーー（こんなテンプレいらねぇーー）!!」

防衛斑と鋼鉄の龍

よう！俺は大森タツミってんだ。今、クアドリガを討伐しにきている。
おっとこっち来たな。
「タツミ！そっち行ったぞ！」
言わなくても分かってるぜ。
「分かってる！」
「アハハハハ！ねえ痛い？痛いのぉぉ?!」
うん、一体何がおきたらカノンちゃんはこんな風になるんだろう……。おっと集中しなきゃ！ほんの一瞬が命取りだ。
「よし、いくぞ！」
クアドリガに向かって行くんだがカノンさん何で後ろにいるの？何で銃口こっちに向いてんの？
「ってカノンさん?!ちょ…ま…ぎゃあああ！」
痛い！めっちゃ痛い！
「チッ！射線上に入るなって私言わなかったっけ？」
カノンさんそりゃ無いぜ……
「タ…タツミィィィィ!!!」
あ、ブレンダンの声が聞こえるー
「ブ…ブレンダン。後は任せた……ぜ」（ガクッ）
まて！しっかりしろ、傷は浅いぞ！」
ハッ！俺は一体何を…天国の婆ちゃんが見えたぜ……
「よし！トラップだ！」
そうしてるとブレンダンがトラップを仕掛けた。
見事に引っかかるクアドリガ。
「オーケー、たたみかけろ！」
「さぁ、消し炭になりなさい！」
カノンさん、あんたが言うとシャレにならんから。
そうこうしてるとクアドリガがかなり弱ってる。
「止めだ！せいっ！」

最後にショートブレードで切ってクアドリガは倒れた。
ふぅ、やっと終わったか。
「よーし！二人共お疲れ！」
「ああ、今回も生き残れたな」
「はい、私今回は誤射が少なかった気がします！」
あれで？一回しか描写してないけど、十回はくらったぞ？だけどカノンちゃんを傷つけたくないしな。
「う…うむ、確かに少なかったかもな……」
ナイスブレンダン！その台詞に乗っかろう。
「あ…ああ、そうだな……」
これで大丈夫か？気づいてないよな？
「えへへ、ありがとうございます～」
よし！気づいてない。でも誤射は直そうな。
「そんじゃ、帰ろうぜ」
そう！帰ってヒバリちゃんをデートに誘うんだ！
「ああ、そうだな」
「はい！帰ったらクッキー焼くんです！」
お！クッキーかぁ美味いんだよなー。
そんな他愛無い話をしていた。そんな時だ、あいつが来たのは。

ガタッ
「だれだ！」
物音がしたのでそちらに目を向けた。一瞬民間人かな？と思ったけど全然違った。そこにいたのは
一対の大きな翼、大地を踏みしめる四肢、全てを睥睨するような顔、全身を覆う鋼鉄の鎧。
まるで物語のドラゴンのようだった。
「グルオォォォーーー!!」
咆哮。
それだけで分かった。絶対に勝てないと。全身が震える。今すぐに逃げたい。だが体が金縛りに有ったように動かない。

視線だけで隣を見ると二人共同じように固まっていた
ーーああ、ここで死ぬんだな。
そう思ってしまう程に格の違いというのを知った。

だが、そのドラゴンは何もせず踵を返して何処かに飛んで行った。
ドラゴンが飛んで行った後、ようやく金縛りがとけた。
「っ!はぁっはぁっはぁっ!」
今まで忘れていた呼吸を再び始める。
「何なんだ、あの龍は……」
「分からない。だが、少なくとも俺たちでは絶対に勝てない」
ブレンダンも震えながら言った。カノンちゃんは……
「……」
呆然としていた。無理もないか、カノンちゃんはまだゴッドイーターになってから日が浅い。
とりあえず今は全員で帰ってあの龍の事を報告しなければ……

二ヶ月後、黒髪幼女

おっす。クシャルダオラだ。
ゴッドイーターに会ってから二ヶ月が経った。いやーあの時は逃げたけど追ってこなくて良かった。
あとこの二ヶ月で起こった事を話そう。と、言ってもただ適当に移動して喰ってを繰り返しただけなんだが。
まず最初に言いたい事。
全然進化しねぇ！本当に進化しない。オラクル細胞マジ仕事しろ。
次、進化はしないけど強化はされた。
まずクアドリガを喰う事によって甲殻が硬くなった。顔以外ほとんど神機が通らない。エフェクトで言うと
顔→オレンジ　体→弾かれる　足→弾かれる　翼→緑　尻尾→緑
という具合だ。中々強い。
次にコンゴウ喰ったらブレスが強くなった。
ビルを吹っ飛ばすのが村吹っ飛ばすくらいになった。
撃ってみた時は唖然としたよ。村が一つ更地になるんだからさ。
あ！その村に人はいなかったからな。
それと、風も纏える様になった。
そう！龍風圧だ！クシャルダオラと言えば龍風圧。あの厄介さは戦った者なら分かるだろう。近づけば風圧で尻餅つかされ、起き上がる時にブレスをくらって吹っ飛ばされる。しかも遠距離攻撃は弾かれる。
今までは使えなかったんだよな。
そして三つ目。子供拾った。八歳位の女の子。
いや、ロリコンじゃないぞ？此れには深い理由があるんだよ。だからさ、そんな犯罪者を見る様な目で見ないでくれないか。
それで理由なんだが、その女の子はオラクル細胞で出来ていたんだ。ちなみにシオじゃないぞ。黒髪だし。
容姿なんだが黒髪で腰まで届いていて、顔は可愛い。ただ無表情。感情は豊かだけどな。

名前はクオンと名付けた。
何でクオンか？あれだよ、俺喋れないじゃん？それでまぁ名前をつけて欲しいと言われて唸るしか無い訳ですよ。ただ怖がらせないように明るくな。その時の鳴き声が
「クオォン」
だった訳よ。そしたら何故かそれ採用みたいなノリで勝手にクオンになったんだ。
「……ねぇ」
「グルルゥ（何だ）？」
どうやら御呼びのようだ。クオンは俺の上に乗っている。
「……何処行くの？」
「グルルゥ（う～む）……」
どう答えようか。とりあえず贖罪の街の方を尻尾で指した。
「……そう」
結構無口なんだよな。無口無表情なロリって感じ。でも感情は分かりやすい。なんとなく雰囲気で分かる。喜んでるとか怒ってるとか。今は、退屈なのかつまらなそうな感じだ。さっきから歩いてばっかだからな。
「……ねぇ」
「グルルゥ（今度は何だ）」
「……前からアラガミ来てる」
「グル（なに）！」
見てみると前からボルグ・カムランが来ていた。よし、今日の昼飯だな。
「ガアァ！」
ボルグ・カムランに向けて弱めのブレスを撃った。弱めとはいえ古龍のブレス、簡単に当たって貫通した。
「……ご飯」
そんなに食いたいかクオンよ。さっきから涎が垂れてるぞ。まあ、待つ必要も無いしとっとと食うか。
「グルルゥ（いただきます）」

「……いただきます」
二人で食事前の挨拶をして食べ始めた。蠍も意外と美味いな。クオンも満足そうだ。
「グルルゥ（ごちそうさま）」
「……ごちそうさま」
ボルグ・カムランを食べ終え、一応腹が膨れた俺たちはまた歩き出した。

原作は始まっていた

はろー、クシャルダオラだ。
やって来ました贖罪の街！二ヶ月ぶりだぜ！
何で俺こんなにテンション高いんだろう。まあそんな事はどうでもいいんだ。昨日から歩きっぱなしで疲れた。日が暮れた後も歩いて今はもう朝だ。
腹減ったたな、とりあえずオウガテイルでも食うか。あれあんまり美味く無いんだよな。数は多いから非常食になるけど。
「解せぬ」ｂｙオウガテイル
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
さて、朝食は食ったし適当に歩き回ろうかな。
「………フウマ」
「グルルゥ（何だ）？」
あ、フウマは俺の名前な。あらすじの所に書いてあった筈だ。
「………ゴッドイーターがいる」
「グルルゥ（マジで）?!」
逃げるか？いや、いいか。どんな奴か見ておこう。
あと何でクオンが分かったかと言うと単純にクオンの索敵能力が凄く高いからだ。なんでも半径十ｋｍで生物ならだいたい察知出来るらしい。
「グルルゥ（しょうが無い、お前は隠れてろ）」
「………分かった……ステルスフィールド、展開」
そして、クオンが消えた。いや、背中に乗っているからそこにいるが透明になったという事だ。それと同時に気配も消えた。
説明しよう。クオンのステルスフィールドはあらゆるものから見えなく出来る。それだけで無く、オラクル細胞も探知されなくなるし、匂い、音、気配まで消すという何それチートと言いたくなるような能力なのだ。
しかも任意で常時展開出来る。
まあその代わりに攻撃力がほとんど無いんだけどな。

おっと、それはそうとして早く見にいくか。さーてどんな奴かな。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ここら辺かな?といたたいた。って嘘だろ?!

そこにいたのは三人のゴッドイーターがいた。それは問題無い、問題なのはその三人が

雨宮リンドウ、神薙ユウ、アリサ・イリーニチナ・アミエーラだからだ。これってもしやあのシーンか?

「いいか、何度も言うが命令は四つだ」

リンドウの声が聞こえてくる。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。んでもって運が良かったら隙をついてぶっ潰せ」

おおぅ、まさかあのセリフを聴けるとは。

「了解です!」

神薙ユウが答えた。

「旧型は旧型なりの仕事をしてればいいと思います」

あれは初期アリサか。なかなかきつい事言ってんな、俺にはどうでもいいが。あ、置いてかれた。雲を見るやつだな。なんか文句言ってるけど命令だからかしっかりやってる。

「………ねぇ、もういい?」

その言葉とともにクオンのステルスフィールドが解除された。隠れ続けるのは嫌らしい。

「グルルゥ(もういいぞ)」

ここから移動するからな。原作が始まっているのは確認出来てるし、ずっとここにいては見つかるからな。

そんじゃ昼飯探しに嘆きの平原に行きますかー。

この時、もう少し注意していればあんな事にならなかっただろう。

そして、昼飯の事ばかり考えてなければ聴いて置く事が出来ただろう。

「ーーーあれが鋼鉄のアラガミ…か。背中に乗ってる少女はいったい……特異点か？」

その言葉は廃れた街に消えていった

ゴッドイーターの襲撃

ちっす、クシャルダオラだ。
今ゴッドイーターに襲われている。モブキャラが四人。クオンは近くに隠れている。
足を斬られる。だが当然弾く。
「クソ！此奴なんて硬さだ！」
無駄だよ。貴様らごときがこのクシャルダオラに傷をつけられるとでも思ったか！
素早く近づき噛み付く。それだけであっさりと一人死亡。
「ジョン?!ってめぇよくもジョンを！」
「待ってガルフ！無防備に突っ込んじゃダメ！」
今の奴ジョンって言うんだ。なんかありきたりな名前だな。
こっちに突っ込んでくるガルフと言う奴を前脚で切り裂く。三枚に下ろされた。うわっ、グロ。
「ガルフ?!これはマズイね、リリー撤退するよ」
「でも！っ分かったわ、でもどうするの？」
む？撤退するのか。あいつ等は俺に攻撃してないし見逃してもいいか。動きを止めて相手の行動を待つ。
「止まった？とにかく警戒しながら撤退するよ」
「了解よ。……いつか絶対に殺してやる、ジョンとガルフを殺された恨み……必ず！」
リリーと言う奴が捨て台詞を吐いて撤退して行った。
……まったく…そっちから攻撃して来たのに被害者面してんじゃねぇよ。
「グルルゥ（クオン、もういいぞ）」
隠れていたクオンを呼ぶ。
「……お疲れ」
別に大して疲れていない。俺がやった事は噛み付くのと前脚で切り裂いただけだ。
「……ご飯」

二言目から飯かよ。いや、いいんだけどな。
ゴッドイーターに襲われるのは始めてでは無い。前に六回くらい襲われた。攻撃して来た奴は全員殺したがな。
なんか人を殺しても特に何も思わない。それはこの体になったからなのか、それとも元からそう言う人間だったか…今じゃどうでもいい事だな。
「………フーマ…どうしたの?」
「グルルゥ（いや、なんでも無い）」
少し考えすぎていたようだ。
にしても最近ゴッドイーターの襲撃が多いな。やっぱ俺が珍しいからかね。どうでもいいか…攻撃して来た奴は殺す…それだけだ。
おっといい加減食うか。
「グルルゥ（それじゃ、いただきます）」
「………いただきます」

――――――――――――――――――――

「グルルゥ（ごちそうさま）」
「………ごちそうさま」
ふぅ、物足りないけどそこそこ美味かった…クアドリガと比べると劣るけど。
「………次…何処いくの?」
そうだな……この体を強化するか、主に耐性系。やっぱり雷属性が弱点だからヴァジュラ種を狩りに行くか。プリティヴィ・マータも自分の属性強化が出来るし。あと火耐性もあげなきゃ。火はラーヴァナやグボロ堕天かな。火はそこまで重視してないから、ヴァジュラ種とラーヴァナがいる贖罪の街に行くか。
まさかすぐに戻る事になるとは…何のために贖罪の街を出たんだろう……
「グル!グルルゥ（よし!贖罪の街に出発だ）」
「………おー」
地味にノリがいいですねクオンさん。

大量の食事

おいすー、クシャルダオラだ。
今贖罪の街でヴァジュラ狩ってる。
「グルオォォー（待てやゴルァー）!!」
「……ご飯」
上から跳びついて首をへし折る。
グキッ!と音がしてヴァジュラが倒れた。
とっとと食って次だな。クオン早く食うぞ。俺とクオンは一心不乱にヴァジュラを食った。これで十二匹目。
元々弱点属性だったからかなかなか耐性が上がらないし、余り美味く無いから少しイライラしている。あープリティヴィ・マータ食いてー。
プリティヴィ・マータは氷属性だから美味く感じる。味はバニラアイスみたいな味だ。
お!ヴァジュラ発見
「グルオォォー（死ねやゴルぁー）」
ふぃー、そろそろ面倒くさくなってきた。ディアウスさん食えば一気に上がるかな?
あ”ーマータ食いたいマータ食いたいマータ食いたいマータ食いたいマータ食いたいマータ食いたい。
「……フーマ」
何ですかクオンさん、今マータ探してるんで手短にして下さいね。
「……この先…プリティヴィ・マータ……多数」
ＭＡ・ＺＩ・ＤＥ?!よし食いに行こう今すぐ食いに行こう。
「……でも…ゴッドイ「グルオォォー（行くぜ俺の飯ぃぃ）!!!」
クオンがなんか言った気がするけどそんな事はどうでもいい。今の俺はアリサの手料理を食べ続けた後ムツミちゃんの手料理を目の前に置かれたような気分だ。
焦げた料理を食べ続けた後にお袋の味みたいな料理を出されたとも言える。マータはお袋じゃないけど。

とにかく全速力で向かう。マータ達よ俺の糧となれ！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

見つけた！少なくとも十匹はいる。

「グルオォォー（食い尽くすぜぇー）！」

まずは近くにいた奴から食う。

「ヴオォォーー！」

断末魔を上げて倒れるマータ。その声で全てのマータがこちらに気づく。問題は無い。

「グルルゥ（クオン、一旦降りろ）」

「………分かった」

クオンを降ろして離れてもらう。準備完了だ。敵は俺を囲んでくる。馬鹿め、囲んだ所で俺には効かない。敵が囲み終わった所で俺は咆哮をした。

「グルオォォーーーー！！！！！」

その時、マータ達が吹っ飛んだ。

俺がやったのは龍風圧だ。こんなに威力ないって？俺は古龍だぞ、それにコンゴウ食いまくって強化した。別におかしくないだろ。

とは言え、風圧では簡単には殺せない。これは体勢を崩すのと遠距離バリアのためだ。よって一人づつ殺していく。

さーて、蹂躙だ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーー五分後、食糧（屍）の山が出来た。

消えたらもったいないからクオンを呼んで早く食う。やべぇめっちゃ美味ぇ。不味いもんばっか食ってきたからかな？

さて、口直しも終わったしまたヴァジュラ狩りますか。

「………アラガミまだいる」

マジで？何処だ。

「………教会の方」

教会の中か。とりあえずアラガミが通る大穴から見てみる。

「グルルゥ（Ｏｈ…マジかよ）」

つい言葉がもれてしまった。何故ならそこにいたのは

雨宮リンドウとディアウス・ピターだからだ。
リンドウが行方不明になるやつか。あ、腕食われた。
よし、ディアウス食いにいくか。腕輪が取れたゴッドイーターはあまり警戒する必要がない。リンドウは強いからこれで心置き無く戦える。
「グルオォォー!」
まずは気づかせるために威嚇の咆哮をする。どうやら二人共気づいたようだ。
「な?!鋼鉄のアラガミだと?!」
リンドウがなんか言ったが無視、ディアウスに突進していく。
「ガァァァー」
向こうがこちらに威嚇してくるが遅過ぎる。突進の勢いを維持しながらブレスを顔面に吐いた。
「ガァァッ?!」
驚いてのけ反るディアウス。だが俺の攻撃はまだ終わっていない、体当たりをする。クシャルダオラの巨体が体当たりをすれば当然強い衝撃を与える。それだけでなく相手の体をふっとばす事になった。
「ギャウ!!」
壁に当たって悲鳴を上げるディアウス。体勢を立て直そうとしてるがさせない。顔を押さえつけて首を噛み切り、絶命させた。
ふぅ終わったか。そういえばリンドウは何処だ?姿が見えないから逃げたか。まぁ攻撃してきた事ないし見逃してもいいか。
それよりもこのディアウス・ピターをどうするかだな。
「グルルゥ（クオンと一緒に食うか）」
そう言ってクオンの所に戻って一緒に食った。
ディアウス・ピターはヴァジュラと比べて美味かった。

原作少し崩壊

ついに……ついに雷耐性を手に入れたぞぉぉぉぉー!!!

おっとすまん、あまりの嬉しさについはしゃいでしまった。ディアウス・ピター食い終わった時にゲットした。なんか腕輪があったけど捨てといた。

次は火耐性を手に入れたいな。この世界に龍属性は無いから弱点は一つ減ってる。って事は角が折られる心配が無いという事だな。

さて、火耐性はラーヴァナにハンニバル、シユウ、グボロ堕天、ボルグ堕天あたりかな?

目的地は煉獄の地下街だ。さぁ、レッツゴー!

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー フェンリル極東支部

人類最後の砦、フェンリル。その最前線である極東支部。そこに第一部隊が帰還した。本来いるはずの無い人を連れて。

「お帰りなさい皆さん。ってリンドウさんどうしたんですかその腕?!」

ゴッドイーター達を迎えるのは竹田ヒバリ。フェンリル極東支部のオペレーターである。

「いやー、ちょっと予想外の事でしくじってな、この通りだ…うぐっ!」

それに対し答えるのは雨宮リンドウ。だがやはり痛むのか自分の腕を抑えている。今は担架に運ばれている。

「そんな事より早く医務室に向かって下さぃ!!」

「そうだな、そんじゃ後は宜しく頼むぜ」

そう言ってリンドウは運ばれて行った。後に残るはヒバリと第一部隊の人達。ちなみにアリサも医務室に運ばれて行った。

「それで、詳しい話を聞かせて貰えますか?」

リンドウが運ばれて行ったのを確認してヒバリは口を開いた。今

回の任務に何が起こったか知るために。

「それは――――――――――――――――――――――――――

「なるほど、アリサさんの錯乱に鋼鉄のアラガミですか」

第一部隊の橘サクヤは今回の任務で起こったことを話した。鋼鉄のアラガミについてはリンドウから聞いた話だが。

「分かりました。この事はツバキさんに報告して置きます、皆さんはゆっくり休んで下さい」

「ええ、宜しくね。ユウくん、コウタくん今日は自室に戻って休みなさい」

「「はい！」」

サクヤは神薙ユウと藤木コウタに言った後、自室に戻って行き、ヒバリは報告のため雨宮ツバキの所に行った。後に残ったのはユウとコウタのみ。ソーマはとっくに戻っている。

「なぁ、ユウ。今回の任務でさ、鋼鉄のアラガミがでたじゃん？」

いきなりコウタがユウに話しかけた。

「いきなり何だ？」

「まぁ聞いて聞いて。あのさぁ、何で鋼鉄のアラガミはリンドウさんがいたのにアラガミの方を狙ったんだろ？」

コウタの疑問はおかしくない。本来アラガミは同種と人間がいる時、人間を優先的に攻撃してくる。だからリンドウを無視してディアウス・ピターを狙うのはおかしい事なのだ。

「さあ？偶々そのアラガミが好物だったとか？」

「いやいや、もしかしたら苦手な物を克服しようとしてるのかもしれない」

「まさか」

コウタの考えに苦笑いで返すユウ。だがコウタが言った事が本当だとは本人以外誰も知らない。

「グルッ（へっくち）！」
「……大丈夫？」
「グルゥ（誰か噂したのか）？」